

開催地名：愛知県大治町	
開催日時	令和元年 12 月 4 日（水） 13：30 ～ 15：00
開催場所	大治町立大治中学校
語り部	吉田 亮一 （宮城県仙台市）
参加者	全校生徒 約 975 名
開催経緯	中学生の防災意識向上を図り、災害に対する意識の改善の一助とするために本講演会を企画した。
内容	<p>（1）防災の基本とは</p> <p>世界中には様々な自然災害が存在している。私たちが暮らす日本でも、地震、津波、台風、火山の噴火、竜巻、豪雪、それからゲリラ豪雨などが挙げられる。このような自然災害はなぜ起こるのか。難しい問題だが、地球自体が動いており、生きているから、地球上の各地で様々な現象が発生し、時にはそこで生活する人間に被害が及んでしまうのであろう。そう考えると、私たちは、自然災害と共存していかなければならないということだ。</p> <p>それでは、自然災害と共存していくにはどのような点に気を付けたらいいのだろうか。私が考える回答は、災害について真剣に考えるということと、考えたことに基づいて行動するということである。自然災害のことをしっかり理解して、危機感を持つということが大切である。その上で想定以上の備えをすることが、防災、減災の基本になるはずである。</p> <p>（2）災害に対する備え</p> <p>災害が起こると、コンビニやスーパーの商品は品薄になってしまうので、東日本大震災以後、食料、飲み水については 1 週間分を用意しておくように案内している。</p> <p>また、その他に自助の部分（各家庭において対応してほしいこと）は、住宅の耐震（外壁を含む）、室内の点検、車の燃料はこまめに満タンにしておくということである。共助の部分（地域において、公助に頼らず対応してほしいこと）は、地域の一員としての自覚を持って行動するということである。日頃から地域の人たちとコミュニケーションをとり、万一災害が起こったら互いに協力して行動することが大切である。中学生の皆さんも、災害時に自分が何ができるのか、是非考えていただきたい。</p> <p>（3）地震から身を守るために</p> <p>大地震はいつ起こるか分からない。小学生であれば下校時ということも考えられる。揺れから身を守るためにランドセルを頭にのせる、と答える児童が多いが、それだけでは足りない。たとえばブロック塀は道路側に倒れるようにできて</p>

いる。頭だけでなく背中もガードしないといけない。下校時に地震に遭遇したら、後ろに手を回してランドセルの金具をはずし、肩の方からふただけを頭にかぶせる。そして体操座りすることで全身を守ることができる。また寝ているときに発震したら、“ダンゴムシ”になることだ。立ってうろうろせず、布団をかぶって丸くなる。枕元には、靴下、スニーカー、ヘッドライト、防犯ブザー、イヤホン付き携帯ラジオ、雨用カッパの6点セットを入れた防災袋を日頃から置いておくが良い。

(4) 東日本大震災を踏まえて

東日本大震災が起こったとき、私の住む地域では全世帯が5日間停電し、ガスは3～4週間、水道は2週間止まった。指定避難所の茂庭台中学校で、17日間避難所が開設され、最大時は200名の方々が避難していた。地域には高齢者と小・中学生しかいなかった。しかし避難所はすぐに開設しなければいけない。避難所でも会社員や高校生は早朝から通勤・登校してしまう。運営には彼らの力が必要だった。避難所で、小・中学生は大活躍してくれた。震災当日、私が一時避難場所にいると、中学生が走ってきて、「避難所の準備ができたので避難してきてください。」と伝えてくれた。避難所に移動すると、中学生が自らのアイデアで、避難所の床に柔道用の畳やマットを一面に敷いて、私たちを迎えてくれた。そのあと、避難所内では必要事項の掲示やごみの分別など、小・中学生が自発的にアイデアを生かして行ってくれた。避難所の清掃や、配給される食料等の管理をしてくれたのも小学生や中学生である。

このような経験から、私は、年少者への防災教育は非常に重要だと実感した。いざという時、彼らは大きな役割を担ってくれる。防災訓練の担当者をお願いしたいのは、地域の避難訓練や避難所設営訓練に児童や生徒を加え、受付や設営、炊き出しなどを体験させてほしいということである。



開催地より

災害時に中学生としてできることは何か、ご自身の東日本大震災での経験をもとに、わかりやすくお話しいただいた。また、避難所での具体的な工夫について、実際に体験させていただき、生徒たちは身をもって学べたと思う。